〔所内研究発表会発表要旨〕

頼瑜所引の木幡義について

研究生　中村　賢識

頼瑜（一二二六～一三〇四）は、加持身説を提唱したことで知られる、鎌倉期を代表する真言僧である。また多くの師より伝授を受けた中性院流の祖としても知られる、重要な学僧である。

本発表は、その頼瑜の師の一人であり、教相事相両面に多大な影響を与えたとされる、木幡の真空（一二〇四～一二六八）の「木幡義」について考察したものである。

真空は、俗名を藤原定兼、号を中観上人と称す真言僧である。出家後は、官僧として出世するも、諸師より小野・広沢諸流の秘訣や印信を受け、遁世して密教の弘通に専念した。その遁世の地が木幡である。

『真俗雑記問答鈔』によれば、頼瑜は真空が木幡に遁世した頃に出会い、真空より小野・広沢諸流の秘訣や印信を悉く授かったとされる。これは、運敞（一六一四～一六九三）の『結網集』の頼瑜伝に、

文応改元に至って木幡観音院に寓りて秘密口訣を中観上人に受け及び諸宗章疏の疑いを質す

とあることからもうかがえる。その教えは、遁世の地である木幡の名をとり「木幡義」と称し、頼瑜著作において度々引用していることでも重要とされる。

しかしながら木幡には、真空の他にも中観上人と称す、澄禅（一二二七～一三〇七）がいたことから、「木幡義」を必ずしも真空の思想と断定することはできないとされる。

そこで、一人の人物に特定することができるか考察するべく、「木幡義」を最も多く引用している頼瑜の著作より「木幡義」に関する記述を抽出してまとめてみた。

その結果、「木幡義」は三論と真言に関する記述が多いことがわかった。なかでも、三論は嘉祥大師吉蔵、真言は六大や菩提心に関する記述が多かった。また、弘法大師空海の『般若心経秘鍵』に関する記述も多かった。これらは、真空と澄禅が三論と真言を主に学んでいたことに関係する。

また事相に関するものとして、阿弥陀、不動明王の記述が多いこともわかった。

以上より、今回「木幡義」を特定の人物の思想と断定することは出来なかった。しかしながら、真空は凝然に『十住心論』を講じ、『浄土往生論註解鈔』を著していたことを鑑みると、四家大乗や阿弥陀についての言及が多いことは、真空によるところが多いとも考えられる。

また頼瑜著作においては、中観上人と称さずに、木幡上人と称していたこと、さらには澄禅が頼瑜より年少のことを考慮すると、澄禅の説を「木幡義」と称すのは不自然であろう。この点を含めて、今後の考察課題としたい。